

2 ガムランの可能性 ——障がい福祉現場からの新たな創造と表現

私は、障がい福祉施設で音楽活動ディレクターとして働きながら、日々音楽実践をさせていただいています。施設に通う障がいがある方と共に音楽活動を始めて10年近くなります。日々の音楽実践をする中で、楽しく、新鮮で驚くような機会を得ることがあります。本稿では、福祉現場の音楽実践の中で、障がいがある方から見出された感性や世界観、表現がどのように生まれてくるのかということを考えてみます。

1 福祉施設でのガムラン——Go Onの結成

私は、「社会福祉法人明日へ向かって」の中で文化活動を推進する「地域連携文化事業部」に所属しています。利用者の方々が行う文化活動の一環として、ガムラングループGo Onを結成して音楽活動を行っています。

Go Onは、2016年に結成され、インドネシアのガムランを中心にタイのキムという弦楽器やサバールというアフリカの打楽器、チェンバロや日本の笙など、世界の民族楽器と一緒に合奏するというスタイルで音楽活動を行っております。

私のガムランとの出会いは、高校生の時に訪れたバリ島でした。バリ島では、いたるところからガムランの音が聞こえ、祭礼が毎日のように繰り広げられ、村に息づく芸能としてのダンスや音楽を目の当たりにしました。

そこで演奏される青銅楽器ガムランの音色は、時に柔らかく、時にけたたましく鳴り響き、その音が空気の震えとなって体を包む圧倒的な響きが強烈なインパクトを残しました。

青銅の音は、日本でも身近に存在していました。小さい頃、私は夏になると祖父母に連れられて、よく京都の祇園祭に行っていました。その時に京都の街に甲高く高らかに響き渡っていたのが

鉦の音色でした。また、はるか遠くまで音波が伝わっていくお寺の鐘や仏壇にあるおりんの音色は、神仏と人々を媒介する音として存在していました。ガムランと日本に共通する祈りの音色として通底するもの、それが青銅の響きでした。

大学の修士課程では、古代の土笛を研究していました。粘土でつくられた古代の楽器は、当時の形を残したまま、物言わぬ状態で現代に残されている。失われてしまった古代の響きをどのように蘇らせることができるのか、想像力を働かせる必要がありました。

あるアメリカのアーティストは、古代アメリカの土笛を研究する傍ら、創作的な活動もしていました。

粘土の可塑性は、多様な空間構造の可能性があり、パイプ状の笛やオカリナのような丸い形もあり、また球体が連なった形のものなど、空間構造が複雑な土笛をつくることができました。粘土という素材に向き合った時、創造力を働かせると形や演奏の可能性を見出すことができました。それは、まるで古代からの風が、楽器を通して新しい響きとなって蘇ってくるようでした。

粘土の可塑性、古代性、創作をキーワードにして、土笛づくりのワークショップを大学の授業で実践していました。その中で、縁あって現在私が勤めている法人で、障がいがある人たちと土笛づ



多空間土笛（著者制作）

くりワークショップをする機会をいただき、彼らの持つ驚くべき想像力や感性、才能に触れていきかけとなりました。

日々、障がいのある方と過ごす中で、シンプルな身体運動の中で合奏することができる打楽器のもつ可能性に着目し、2014年にインドネシアからガムランを法人に導入しました。このガムランは西ジャワ・スندا地方の楽器です。特徴として、ガムランセットのピッチを雅楽に近づけてみようというこのことを試みました。基音をピタゴラス音律のA = 430ヘルツとし、ガムランの音階の特徴を残しつつ、雅楽の楽器と合奏ができるように考えました。インドネシアの楽器と日本の楽器が音律で結びつく、そういったイメージを持っていました。

2 Go Onの音楽

ガムランを導入し、障がいがある方と一緒にどのような音楽活動ができるのか、ということが初めの課題でした。まず、伝統音楽としてのガムランは、技術において洗練されており、伝統曲を知り障がいや身体障がいのある方が演奏するのは至難の業でした。そこで、一旦原点に立ち返り、別のアプローチを模索し始め、ガムランの楽器に触れる中で、どのようにすれば合奏することができるのかを日々の音楽セッションの中で考えていきました。

施設に通所されている利用者の皆さんは、体の一部だけ動くことができる方や言語によるコミュニケーションが難しい方、文字や言葉、楽譜を理解するのが難しい方もいらっしゃいます。それぞれの固有性を考え、能力や特徴を活かすことに着目した音楽活動の事例を紹介していきます。

(1) 色や数字で表す音階

楽譜を数字譜にしたり、音階に色付けをしたり、楽器自体に音階の色と数字を書き、音楽をわかりやすく学ぶことができるようにシンプルにすることを重視しました。

例えば、演奏者が目で見てわかりやすいような



指示カードおよび数字による楽譜

大きな指示カードをつくることや、A4サイズの色付きの数字板をつくり、それを並べてメロディーとするなど、理解するための経路を複数つくることで、障がいのある方が楽しむことができるように工夫しました。コミュニケーションの経路を見出すことができれば、合奏に参加できる方が増えていきます。

(2) イメージの共有

情景のイメージを共有し、伝えることで音の表現に繋がることがあります。例えば、演奏者に「静かな水面に 水際に立つ樹の葉っぱが落ちて波紋が広がる」という状況を音楽で表現してみようとインストラクションを与えます。そして実際に葉っぱに見立てた和紙（音階を表す数字と色がプリントされている）を指揮者が床に落とす。水面に見立てた床に和紙が落ちる瞬間に波紋が広がるようにガムランを一音鳴らしてみます。イメージを共有すると、それが音にも影響し、静けさや自然の風のイメージ、あるいは木の葉が落ちる時の揺らめきなど、多くの情報を表現することができます。演奏者は、葉っぱがダンスのように落ちていく軌跡を追いながら水面にはらりと到達する瞬間に音の波紋が変わっていくというイメージで音楽をつくることもあります。

(3) 即興演奏からの記録

施設での音楽活動の休憩時間に、ガムランを弾きながら同じメロディーを楽しそうに繰り返していた利用者の方がいらっしゃいました。このメロディーが耳に残ったので、採譜し、曲として演奏しています。また、自由にリズムをあわせて即興演奏を楽しんでいる時に聞こえてきたメロ

ディーを断片的に採譜し集めて、演奏することもあります。

3 コミュニケーションの回路を開く

日々の音楽活動の中で利用者の方の趣向を発見し、音と向き合って試行錯誤する中で、コミュニケーションができなかった人たち、あるいはコミュニケーション方法がわからなかった人たちの間にコミュニケーションの回路が開かれていくようになっていきました。

音は、コミュニケーションの壁を越えていく力があると考えられます。目に見えない振動としての音は人と人の境界を相互に浸透していき、お互いを結びつける存在であると捉えて、音楽活動を進めています。

(1) 聴き合う環境づくり

音楽活動で大切にしていることがお互いの音を「聴く」ということです。「聴く」ことを重要なキーワードとして、活動中に「お互いの音を聴こうね」と皆さんに伝えています。

「聴く」ことによって、音色やメロディーの抑揚、音の微細な変化など、音楽だけが表現できる感覚的なものが伝わります。そこに意味づけをせず、ただ、ここにある音でコミュニケーションを取っているという状態を合奏で作り出すことができます。そうすると、言葉の理解や、身体に障がいがあることを超えて、感覚的に繋がる場になってきます。

例えば、即興の合奏をGo Onのメンバーでしている時に、終わりのタイミングは決まっていない中で、メンバーが阿吽の呼吸のように、自然に曲が終わることがあります。そういった聴き合う集中した状態では、聴くことと表現することが一体となって演奏が進んでいきます。そこでは、自分だけの世界が外に広がっていき、外の世界とコミュニケーションを取り始める。このことが、障がいがある方たちと合奏する上で非常に重要であると考えています。

そして、合奏を通じて生まれるものが、意思の

表出や表現であり、そこで周りと協力して協調すること、あるいは信頼することが生まれます。お互いが集中して聴き合って、いい演奏ができた時に信頼感が生まれるのではないかと考えています。

(2) アーティストとのコラボレーション

Go Onの音楽活動の特徴として、様々なアーティストとのコラボレーションを行っています。インドネシアのガムランと、アフリカンパーカッションやアフリカの弦楽器であるコラ、あるいは、ヨーロッパの古楽器との合奏を行っています。コンテンポラリーダンスの音楽制作や海外アーティストとの影絵芝居の共同制作も行いました。

(3) 雅楽団体との共演

Go Onが雅楽の団体と合奏を行った「ガムラン・エチュード」という曲があります。この曲は作曲家の藤枝守に委嘱した作品で、Go Onが様々な楽器や楽団と一緒に演奏することができるように作曲されました。

藤枝守の作曲方法は、脳波の測定器で植物の電氣的な波動を記録し、その波をデータとしてPCにとりこみ、波動を音符に変換することでメロディーのパターンを導きだし、コレクションして作曲されます。「ガムラン・エチュード」は、福岡市東区にある香椎宮の綾杉という御神木から作曲されました。1000年以上も香椎という土地の歴史を見守ってきた綾杉の波動から見出されたメロディーの合奏が、ガムランと雅楽器によって実現しました。



雅楽団体とガムランの合奏

4 福祉現場が持つ音楽の可能性

Go On の活動の中で、即興演奏を行うこともあります。何もルールがない状態から遊び心が生まれ、うたやメロディーが生まれる。また、即興演奏の中から楽しい演奏ができたという喜びや充実感が生まれることもあります。支援者として、強制性がないような状態をいかにつくるか、ということを中心に、音楽活動を行っています。

利用者の方が創作したメロディーに驚くことがあります。利用者の皆さんがつくり出す作品には想像力と驚きがあることを実感し、アーカイブや作品を共有することを大切にしています。

また、共創活動と名付けている同時多発的な共同制作も行っています。作曲をしたい人はこの活動時間の時は曲を作り、作詞がしたいという人は詩を考えるというように本人が選択して、絵画やダンスなど、自分が好きなことを高めるようにしています。共創活動の最後の時間には、創作した作品を発表する機会もつくり、表現やパフォーマンスを共有することで、クリエイティブな相互作用が働きます。その中で成功体験を積み重ねていく中で、アイデアが蓄積され、共同作品につながっていくと考えています。共創活動は、広い空間でのワークショップとしても行いました。

5 詩のこころ

Go On のメンバーの中で、特に詩の才能を発揮される方がいらっしゃいます。その方がどのような言葉の感性を持っているかということについて



共創活動ワークショップ

紹介いたします。

知的障がいがある方の中には物事を分析的に捉えることが難しい方もいらっしゃいます。

「分析的に捉えることが困難」を言い換えると、「シンプルに捉えることができる」と考えることもできます。分析よりも、シンプルに物事を捉える能力が高いということは、抽象的な思考に優れており、詩的な表現と相性がいいと行うことができますと考えています。

言葉の選び方がシンプルだからこそ生まれる世界観が、歌詞や物語に繋がっていきます。シンプルな言葉で世界を丸ごと捉えているような言葉を紡ぎ、曲に詩をのせる方もいらっしゃいます。

分析的な能力と相反するような能力は、鳥瞰的な能力であると考えています。天から地上を見る鳥の目線で物事を捉えるということは、おおらかな言葉の選び方につながってきます。

私が考えるのは、この鳥瞰的な感覚、大いなる目線で物事を見ることは、古代の人々が音楽を通じて畏敬の念をともなって祈りをささげていた世界観に重なる感覚であると考えています。Go On メンバーの詩は、ガムランの響きに耳を澄まし、詩と響きがお互いに触発されながら創作されていきます。

私がこれまで関わってきた伝統音楽は、古くからの文化交流や、日常の中から生まれてきたものと言えます。創造と表現が蓄積されていく場所は、新しい文化が生まれる場所でありまさに福祉の現場に可能性があると考えています。民族音楽やガムラン音楽、あるいは伝統音楽の源泉にある創造力は思ってもみなかった音楽的なアイデアや生き生きとしたメロディーを生み出すことができると考えています。

このような創造の源泉、音楽の源泉に触れているということが、これからの音楽を開く鍵になるのではないかと考えています。Go On のメンバーもお客さんに喜んでほしいという気持ちで、新しい曲をつくり、その音楽を多くの方にお届けすることができれば幸いです。（渡辺 融）